第41回日本看護科学学会学術集会　2021
示説

技能実習（介護）で来日したインドネシア人研修生の高齢者ケアのとらえ方の特徴

小笠原広実（公益財団法人 日本アジア医療看護育成会）
新美純子　（公益社団法人 トレイディングケア）
野崎真奈美（順天堂大学　医療看護学部）

日本看護科学学会 COI 開示

筆頭者氏名　小笠原広実
所属名　　公益財団法人　日本アジア医療看護育成会

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません。

- インドネシアでは、20年後の高齢化社会に向けて、高齢者看護への意識が高まりつつある。
- 2017年から、母国への技術移転を目的に、技能実習生（介護）が来日するようになった。文化、制度が全く異なる母国に日本の高齢者ケア技術の何を伝えられるかは課題である。
- 有意義な技術移転のためには、まず高齢者や高齢者ケアに対して、どのような意識を持っているのかを知り、それに合った指導を考えていく必要がある。

【研究目的】インドネシア人実習生(介護）の来日直後の高齢者ケアのとらえ方の特徴を明らかにする。

【研究方法】対象は、技能実習生として来日し研修中のインドネシア人。

①母国語による記述式調査用紙(無記名)を作成する。

②来日1か月後に調査を行う。　③日本語に翻訳し、内容毎に短文化する。

④その特徴を類別し、カテゴリー化する。

【倫理上の配慮】監理団体責任者の許可を得た上で、研究目的を口頭と文書(母国語)で伝え、口頭で同意を得た。記述内容は、今後の実習活動やその評価には影響しないことを保証した。

【結果】

2020年に来日した12名（男性4名、女性8名）から回答を得た。
看護師教育課程修了8名（3年制4名、5年制4名）介護士研修コース修了4名であり、
平均年齢26.1歳（19～40歳）であった。
日本語能力試験（JLPT)は、

N4合格10名：基本的な日本語を理解できる
N3合格 2名：日常的な場面で使われる日本語をある程度理解できる

- 高齢者の世話（家族を含む）をした体験あり 6名　体験なし　6名
- 認知症の人に関わった体験あり　2名　体験なし　10名

以下の調査項目ごとに、記述から特徴を類別してカテゴリー化した。

①老年期の特徴は何か　6カテゴリー
②看護と介護の違いは何か　5カテゴリー
③介護の仕事内容をどうとらえているか　3カテゴリー
④日本で学びたいことは何か　6 カテゴリー

1．老年期の特徴のとらえ方

「インドネシアでは高齢者の定義が60歳以上ですが、どのような特徴がありますか？」の問いに対する回答を類別化したところ、6カテゴリーとなった。記述の主なものを示す

カテゴリー	主な記述
〈身体機能や免疫力の低下〉	五感の機能低下、　筋力や運動能力の低下、免疫力の低下
〈外観の衰え〉	体の外観の変化（皮膚のしわ、やせる） インドネシアでは50歳前後から身体的衰えが大きくなる
〈脳の機能の衰え〉	神経の衰えからくる注意不足、忘れやすい（ぼけ）
〈心の状態が不安定〉	心が傷つきやすい、不安、心配を抱える、黙り込んだままになる 周囲から傷つけられたと怒る
〈性格の変化〉	怒りっぽくなる、言動が子供のようになる、感情的になる、 エゴイスト、わがまま
〈人間関係の減少〉	人とのかかわりが少なくなる、自尊心が低下してひきこもる、 より孤立する

2．看護と介護の違いのとらえ方

「看護と介護の違いは、どのように理解しましたか」の問いに対する回答は5カテゴリーに類別された。

カテゴリー	看護とは何か、の主な記述	介護とは何か、の主な記述
〈対象者の違い〉	どんな年齢の患者さんも対象になる	老人の看護 高齢の患者さんをお世話する
〈医療的援助の有無〉	生活および医療的な援助も行う。 医師と協働する。 医師の指示または同意のもとに行為をする	医療機器を使わない
〈働く場の違い〉	病院で働く	老人ホームでの仕事
〈教育課程の違いと専門職の資格の有無〉	正規の教育を受けて専門職の資格・認定が必要	訓練されたヘルパーが行う
〈仕事内容の違い〉	生活および医療的な援助も行う。 服薬、点滴、傷の手当、カテーテル、注射、生活指導に責任を持つ	基本的な生活の必要性を満たす。入浴介助、排泄などを見守って助ける あきらめてしまった人の気晴らし、おしゃべり

3．介護の仕事内容

「日本ではどのような仕事をするか知っていますか。知っていることを教えてください」の問いに対する回答は、3カテゴリーに類別された。

カテゴリー	主な記述
〈日常生活の援助〉	食事の介助、入浴介助、服薬介助、トイレに行く介助、おむつ交換 衣服の着替え、ベッドから車いすへの移乗
〈観察〉	いろいろな観察
〈精神的支援〉	老人患者さんの看護 心理的な援助 話を聞く 楽しませる

4．日本で学びたいこと

「日本の技能実習（介護）で、何を学びたいですか」の問いに対する回答は、6カテゴリーとなった

カテゴリー	主な記述
〈介護技術〉	ケアの方法、看護技術、 個別性に合わせた正しい技術 ケアギバーの腰痛や疲れを予防する正しいボディメカニクス 母国で、老人のクリニックやデイサービスを起業したいので、 それに役立つ知識
〈高齢者看護〉	高齢者看護の知識と実践
〈日本の高齢者支援の制度〉	高齢者の保険制度、人権を守るための法律、規則
〈老年期の心理〉	老年期の心理やその対応方法
〈長寿の理由〉	なぜ長寿なのか
〈日本人の仕事のスタイル〉	日本人の仕事のやり方（時間の規律を守ることなど）

【考察】

1）老年期の特徴を、機能低下や、心が不安定などネガティブにとらえていた。

- インドネシアでは高齢者の定義は60歳以上となっており、その人口は8.03％（2014年）である。平均寿命は71.9才（2020年）、健康寿命も62歳程度といわれている。
- 高齢者用施設は、高所得者向け施設が少しづつ増えているものの、ほとんどは家族か、住み込みの”ホームケア”といわれる人が介護を担っている。施設は貧困層向けが多く、施設に入ることは、家族に見捨てられたと考える人が多い現状である。
- このような背景からか、高齢者ケアとして、持てる力を発揮させ、その人らしい生活を支援するという記述や、経験を生かして働いているなど元気な高齢者のイメージは見いだせなかった。

2）実際に老人の世話をしたり、認知症の人に関わった体験のない人が多いので、仕事内容が看護師とは異なることは理解していても、コミュニケーションが難しい高齢者がいることはイメージできていないと思われる。

- インドネシアでは、家族や親族が高齢者の世話をすると言われているものの、看護学生を対象にした以前の調査でも、食事や排泄の介助をした経験のある学生は3割程度であった。
- 認知症の高齢者と接した経験のある人は少なく、認知症の症状として「同じ話を繰り返す」という状況を思い浮かべていた。今回の調査でも、認知症患者ケアの体験のある実習生は少なかった。

3）日本で学びたい内容は多岐にわたっていた。公的な介護サービスは母国にないことから、関心が高い。

➢介護サービスの起業を帰国後に目指している人も多く、それに役立つようなことを学びたいと期待していると思われる

➢しかし、施設内の日々の介護業務の中だけでは学べない知識が多いと思われ、期待と実際の仕事内容に乖離が生じていることが指導上の課題だと思われる。

【結論】

◆インドネシア人の高齢者や高齢者ケアのとらえ方の特徴から、日本で学んでほしい課題がいくつか明らかになった。

・生き生きと生活している高齢者の特徴

・日本の高齢者ケアについて幅広い知識（公的サービスについてなど）

・生活の質の向上を図ることや、その人らしい生活を選択できるような働きかけ

◆このように、介護技術だけでなく日本の高齢者のとらえ方を学ぶ機会が必要であると思われる。

◆また、実習生のこのような意識を、指導する施設側が理解していくことも重要だと考える。

◆今後、来日時に抱いているこの意識が、施設に配置され日本の高齢者とかかわっていく中で、どのように発展していくか調査を継続していきたい。

発表に関するお問い合わせ：hogasawara@jamna.jp（小笠原）